

平成30年8月15日(水)

老球の細道431号

## 本気になっている人は少ない

会津バスケットボール協会 室井 富仁

12月になるとテレビで『忠臣蔵』のドラマが放映される。毎年の定番であるが私は大好きである。『忠臣蔵』とは、赤穂浪士たちが、元禄15年12月14日(1703年1月30日)深夜に旧主浅野長矩の仇である高家吉良上野介の屋敷に討ち入り、吉良上野介および家人を殺害した(元禄赤穂事件)事件である。現代風に言えば元赤穂藩士大石内蔵助以下47人の武士たちの要人暗殺テロというところか。

この事件の発端は、元禄14年3月14日(1701年4月21日)の江戸城松之大廊下で浅野内匠頭長矩が吉良上野介義央のいじめの行為に切れてしまい刃傷(刃物で斬りかかった)におよんだことによる。殿中での刃傷に將軍徳川綱吉は激怒し、浅野長矩は即日切腹、赤穂浅野家は断絶と決まった。対して、吉良上野介には何の咎めもなかった。

家老大石良雄(内蔵助)以下、赤穂藩士の多くは、喧嘩両成敗の武家の定法に反するこの幕府の裁定を一方的なものであると強い不満を持った。現代なら裁判所に上告というところであるが、当時は徳川の独裁だったので泣く泣く承諾させられた。しかし、赤穂城での評定では幕府に恭順して開城するか、抗議して籠城か殉死かで紛糾した。

家老の大石内蔵助は御家再興運動に励んだが受け入れられず赤穂浅野家再興は絶望的となった。そこでやむなく藩主の仇として吉良上野介の仇討ちを決定した。いざ仇討ちとなったら、それまで殉死とか籠城するとか威勢のいいことを言っていた120名近くいた部下たちがどんどん脱落してしまった。最終的に47人のレギュラーが残り本懐を遂げた。

大石がなかなか仇討ちの決断を出さなかったのは、自分の命など省みないで本気でやる気のある人間を取捨選択するためであったと言われる。上っ面で威勢がよくかつこのいいことは誰でも言えるが、いざ行動となると及び腰になり「一抜けた」の例は古今東西枚挙にいとまがない。大事をなすことができる者は、何事においても我が身を顧みない本気な人間だけであるということを『忠臣蔵』の歴史は教えてくれる。

生徒指導部長をしていた頃のことである。高校生の喫煙がなくなる。その元凶はタバコの自動販売機にある。だからタバコの自動販売機撤廃運動をやろうという機運が県保護委員会で盛り上がった。そして、実際にタバコ店に赴いて自販機の撤廃をお願いするという直接行動を実行するという事になったら、会津地区以外の他地区は「やはり時期尚早だから来年度にしよう」ということで一抜けた、二抜けたでリタイア。会議で議論している時は威勢のいい意見を言うのだが、いざ行動に移そうとすると先送り先送りで机上の空論、まさに「会議は踊る、されど進まず」であったことを記憶している。

おかげで実際に行動した会津地区事務局の私は、県のたばこ販売組合事務局から猛烈な抗議を受けた。しかしその後、成人であることを証明する「タスポ」の導入などがあり、未成年者の喫煙防止に向けての流れは変化した。行動したことは間違いではなかった。

本気になって志を成し遂げようと思っている人は少数である。少数であることに落胆してはいけない。少数は精鋭である。そして精鋭たちが偉大なことを成し遂げていくのは歴史が教えてくれている。毎年『忠臣蔵』を見るたびに、自分の本気さと指導者が肝に命じなければならない原則を確認する。「選手は指導者が思っているほど思っていない」。